

vol.48 2020 秋号 源流からのたより

ぽたい

源流のひとしづく

ゆたかな未来へつなげよう！

Key Word

- 今こそユニバーサルデザインでいこう！
- 「都市」と「源流学」
- 川上村の特定外来生物指定植物の分布
- 流れ着いた神様
- 森と水の源流館の感染症対策の記録
- 公式Webページをリニューアル
- オンライン授業の取り組み報告
- 森と水の源流館ミニ展示報告「知っているようで知らなかった水源地の森と川上村のいきもの」

森と水の源流館

公益財団法人吉野川紀の川源流物語
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

この春先からの「コロナ禍」と言われる日々、いまできることは？ やるべきことは？を考える中で、ふと前職の頃の記憶があざやかによみがえりました。

阪神淡路大震災の直後、まだ神戸の街への移動もままならない頃、アメリカサンフランシスコからアクセス専門官という行政職の人を招き、神戸で震災後のまちづくりについて講演会を開催しました。ロサンゼルスで、阪神淡路のちょうど

一年前に大地震が起こりました。その復旧・復興の中で、さまざまな人にとって利用しやすい、よりよいまちへ再生する指針作成や指導が自身も車椅子を利用する彼の役割でした。

講演会では、だれもが利用できるまじの実現にあたって「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン」へ発想をかえることの大切さについて紹介しました。

いまこそ ユニバーサルデザインで いこう！

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長 尾上忠大



一言でいえば、「バリアフリー」とは問題を取り除くこと、「ユニバーサルデザイン」とは、はじめから問題を存在させずに、より多くの人のためになるようさまざまな工夫と配慮を行なう。しかもそれがさりげなく、優れたデザインとなっていることです。いま直面する問題に対処するだけでなく、問題を逆手にとり、よりよい、高い効果が得られるようにする、ワクワクできる発想だと思います。

どうせやるなら
逆手にとる発想で
より多くの人やコトにとって
効果があるように
考えようよ！

問題を取り除いた結果、その目的を失うといけません。たとえば転落防止の柵を設けるときは、誰に対しても景色への視線を遮らないような工夫と配慮も必要なのです。



楽しめてナンボ！
学べてナンボ！
の森と水の源流館
であることを
わすれずに。

大阪府営りんくう公園の
ユニバーサルデザインの一例→



森と水の源流館ではソーシャルディスタンスを「よい間隔」と呼び、年輪マークで示す。「よい間隔」は、吉野林業で重要な間伐の知恵である

新しいチャレンジが
新しい「当たり前」に
さらに工夫と配慮が
新しい可能性を拓く。



休館期間中に取り組んだ
「わりばしの歌」(YouTube)

ご多分に漏れず、私たちにも「オンライン」「オンデマンド」への対応が求められます。はじめは「これでは大したことはできないだろう」と思っていました。しかし場数を踏むと、それが違和感のない選択肢の一つと思え、さらにそこにも工夫と配慮を試みるようになりました。特に「オンデマンド」は受け手の都合のいい時に資料や教材を観るいわば番組ソフト、コンテンツです。飽きさせない時間内できかに伝えるかは難しく、何度もやり直し、言葉を選り、わかりやすい画像や映像づくりに挑んでいます。まだまだ未熟ですが、これらによって、より遠く、より多くの人へ届く手ごたえを感じています。これからの新しい時代でも工夫と配慮を常に忘れず挑戦を続けたいと思います。

「都市」と

「源流学」

新連載

川上村から大阪工業大学へ

新たな流れが、いまはじまる

〜正規授業としての「源流学」開講

森と水の源流館の開館当初から、村内外を問わず、広く提唱してきた「源流学」。ぼたりに読んでくださったっているみなさんにとっては、すでにおなじみの言葉ですが、実はこの言葉、源流に関わる自然や動植物、歴史といった学問にとどまらず、源流を通して、そこに暮らしてきた先人たちの知恵や技、文化を学び、自然と人間との関わりを考え、行動し、その体験から一人ひとりが答えを見出していく、といった多様な意味が含まれているのです。

前号までは、森と水の源流館の元館長で、林業家の辻谷達雄さんが、自らの経験を通じて、長年にわたって「源流学」を発信してきました。「百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず。わしらがいま、何ができるんか、考えること、行動にうつすことが大事なんや」。それは、源流の村に生まれ育ち、山とともに生きてきた辻谷さんだからこそそのメッセージ。ただ学ぶだけにとどまらず、さらに一歩、踏み出し、行

動することの重要性を常に源流から都市部に向かって問いかけてきました。

そして、その思いは、いま、いろんな人たちの中で、新たな流れとなつて、動き始めています。

そのひとつが、今年度から始まった大阪工業大学の授業「川上村源流学」です。いままでは、講座や川上村での新生オリエンテーションやフィールドワークなど、単発的な取り組みが中心でしたが、今年、村との連携協定が10年を迎えるにあたり、正規授業として実施されることになりました。

講師には、村長や役員職員だけでなく、林業や地域活動に携わる村民たちも。新型コロナウイルスの影響で、対面型でなく、オンラインによる授業に切り替えられたものの、5月から7回にわたつて、いろんな角度から、水源地の村づくりの取り組みが紹介されました。

授業のなかで、学生たちはどんなことを学び、考えたのでしょうか。企画調整を担当した、川上村水源地球事主事に加藤満さんにお話をうかがい、今号から3回にわたつて、紹介していきたいと思ひます。

村と大阪工業大学の交流が始まったのは、1999年のこと。建築志望の学生が、間伐材の有効利用や林業体験などに取り組む活動への参加をきっかけに、2006年からは各学科の新生オリエンテーションを村で実施。

2010年7月26日には、「連携・協力に関する協定」を締結し、観光資源をPRするウェブコンテンツの制作や、廃校を改装した合宿施設づくりなど、さまざまなプロジェクトを協働で進めてきました。

「10年にわたる村と大学の連携において信頼を積み上げ、そこに関わった人たちが丁寧に関係を築いてくれたからこそ、この正規授業の開講へとつながったのです」と加藤さんは話します。

当初は、大学の梅田キャンパスにあるホールで、村の杉で作ったバイオリンの演奏会でも、との話だったそう。

「村としては、村に来てもらっているものの、なかなか学生に伝えきれない、もどかしさみたいなものがあつて、新生オリエンテーションとかで、水源地の森に行つて終わりのなところがあつて、それとは別に、村の思いをしっかり伝える時間をとれたらいいなあと考えていました」。大学と連携して10年。さらに踏み込んだ連携を、ちょうど思案していたといひます。

また大学側も、学生が地域の課題解決に携われる現場をつくりたいと考えていたこともあり、「ものづくりデザイン思考実践演習」という課題解決型学習の講座のコースの一つとして「川上村源流学」が企画されることに。

「当時SDGsとかも、世の中に大きく出てきたタイミングもあつて、双方の思

いがうまく合致したのだと思ひます。授業では、水源地の村の課題を探り、持続可能な村の仕組みを考えることを目指しました」

授業に対する大学側からのリクエストは、7コマという時間制限と学生の成果物の提出だけで、内容に関しては村に一任。

「ただ水源地の村づくりをしているのではなく、吉野林業やダム建設から生まれた川上宣言など、歴史的な流れも踏まえ、この取り組みをしていることを知ってもらうことが大事。やまいきさんやかわかみらいふ、地域おこし協力隊には、それぞれの「思い」を語ってもらうよう心がけました。

今までは役員職員がまとめて事業紹介をすることが多かったそうですが、それぞれの担当が語ることで、学生はさまざまな価値観に出会うことができました。また村民にとつても村のことを伝えるために、さらに村について調べたりするなど、この連携がそれぞれの深化へとつながりま

た。次号は、授業の内容、学生らの提案について紹介し

ます。(つづく)



学生発表の様子

※連載はコミュニティーライターの西久保智美が担当します。

とによる中毒死などの被害が発生しています。また、化学物質を出して他の植物が生えなくなるようにする他感作用（アレロパシー）が強く、他の植物を駆逐する力が強いのも怖いところです。

川上村では、西河、寺尾、北塩谷、迫、宮の平、白屋に確認されました。特に北塩谷、迫、宮の平で大きな群落が確認されました。

オオカワヂシャ *Veronica anagallis-aquatica* L. (ゴマノハグサ科)

ヨーロッパからアジア北部原産の川沿い、湿地などに生える多年草の帰化植物です。地中を横走する根茎から茎を直立し、大きいものでは高さ1mほどになります。オオイヌノフグリなどと同じゴマノハグサ科クワガタソウ属で、よく似た花を4-9月に付け種で増える他、根茎などの切れ端からも再生し栄養繁殖をして増殖します。準絶滅危惧種のカワヂシャと競合し雑種を形成することも問題となっています。西河の音無川の河原付近、および吉野川の河原で小さな個体が少数見られました。宮の平の水路では大きな個体の群生が見られました。



オオカワヂシャ

その他の注意すべき外来種



アメリカオニアザミ



ジギタリス



シンジュ(ニワウルシ)



ニセアカシア(ハリエンジュ)

今回の調査では、特定外来生物指定種のほか、国の生態系被害防止外来種に指定されている以下のような植物もいくつか見られました。大滝ダムの周辺や白屋ではアメリカオニアザミが確認されました。手袋の上からでも容易に突き刺さる鋭く固いトゲがあって、危険な植物です。

迫、寺尾では園芸植物として知られるジギタリスが見られました。これには猛毒があり、最近増えて問題になっているニホンジカも食べません。そのため、在来種がどんどんシカに食べられてジギタリスだけが広がっていく可能性があります。

シンジュ（ニワウルシ）、ニセアカシア（ハリエンジュ）はそれぞれ庭木、蜜源植物として日本に導入された樹木ですが、今回の調査で村内一円に広範囲に広がっている様子が観察できました。これらについても川上村の実情に応じてモニタリングする必要がありますと感じました。

特定外来生物を駆除するには

特定外来種は来たくて日本に来たわけではありませんが、日本の自然環境に適応して、在来種を駆逐する力の強いものです。在来種は私たちとともに日本の環境に適応し、支えあってきた仲間ともいえる存在です。名前を知らないような生き物でも、どこかで人との関係性があり、消失により直接的、間接的に私たちの生活に問題を及ぼす可能性があります。ですから、科学的に関係性が証明されている如何に関わらず、保全すべきと考えられています。問題となる外来種を駆除するのはこのような考えによるものです。

特定外来生物指定植物の場合は、種のほか、根や茎からの再生能力の高いものが多いので、生育地からそのまま持ち運ぶことも法的に禁止行為になっています。そのため、駆除した特定外来種は、種子や再生能力のある植物体が落ちて、分散しないようにゴミ袋に入れて（できれば2重に）しっかり口をしぼってからゴミに出すなど確実に処分しましょう。

(きむら まさくに：森と水の源流館)



川上村における特定外来生物指定植物種の分布

今回は主役にしたくない主役たちです。川上村においても、特定外来生物に指定されている植物が見られるようになりました。特定外来生物は特に生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす可能性が高いものが環境大臣により指定されていて、規制・防除の対象となっています。川上村の生態系を守るためにはまずは現状把握が必要です。今年実施した調査の速報も兼ねて、どんな種類がどのように生育しているかを紹介します (木村 全邦)

特定外来生物とは

特定外来生物被害防止法により、規制・防除対象とされている外来種で、2005年以降、順次追加され、現在は148種が指定されています。今回取り上げた植物については、16種が指定されています。特定外来生物の移動や飼育、販売などが規制され、違反すると個人で3年以下の懲役や300万円以下の罰金、法人には1億円以下の罰金が科されるなど非常に重い罪に問われます。それほど、我が国の生態系や生活に影響を及ぼす可能性が高い外来種だということが言えます。

調査方法

植物では、川上村においてオオキンケイギク、ナルトサワギク、オオカワヂシャの3種が目視で確認されていました。今回は証拠標本を残して調査をするため、あらかじめ特定外来生物の対策について所管する環境省近畿地方環境事務所野生生物課に問い合わせ、決められた条件の下、採集を行いました。種子が付いているものは除き、根茎など増殖の可能性の高い部位については、慎重に処理して採集しました。

川上村の特定外来生物指定植物と村内での分布

オオキンケイギク *Coreopsis lanceolate* L. (キク科)

茎の高さは30-70cm程度で、5-7月に直径5-7cm程度の黄色いコスモスみたいな花を付けます。原産国は北アメリカで、1880年代に観賞目的で導入されました。繁殖力が強く、荒地にも適応する強靱な性質のため、緑化などでも用いられ、分布を広げていきましたが、在来種を含む多種を駆逐してしまい、生態的に影響が大きいため特定外来生物に指定されました。



オオキンケイギク

本種は花がきれいなので、草刈りなどでも残される傾向が強いのも悩ましいところです。

川上村では、東川、人知、白川渡に確認されました。白川渡にかけて大きな群落が見られましたが、今回の調査では草刈りで押さえられていました。

ナルトサワギク *Senecio madagascariensis*. Poir. (キク科)



ナルトサワギク

東アフリカ原産で、1976年に鳴門市瀬戸町で見つかった帰化植物です。発見当初が外来種とみられたものの、世界に2000種以上あるサワギク属の不明種との扱いで、長く学名がわかりませんでした。1997年スミソニアン博物館のHarold Robinson博士より学名が判明し、1999年に発表されました(木下他1999)。

川上村では北塩谷などで小規模に見つかってはいましたが、大群落にはなっていませんでした。ところが、2011年の台風第12号による紀伊半島大水害で地滑りを起こした迫区西谷の復旧工事現場で大群落が発生するようになり、周辺に大きな群落が広がるようになりました。工事車両により下流域より持ち込まれたものと推察されています。全草にアルカロイド系の毒を含み、ウシなどの家畜が牧草地に侵入した本草を食べるこ

その三四

歴史に詳しい職員、成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

流れ着いた神様

和歌山県かつらぎ町は、北は和泉山脈、南は紀伊山地の山々が連なり、町の中央を紀の川が流れています。紀の川市と並び果樹の栽培が盛んな土地で、和泉山脈の山麓には柿やミカンの果樹園が広がり、その中を京奈和自動車道と、広域農道が並んで走っています。

その広域農道沿いに柏木という集落があります。遠くに紀の川を眺めることができる見晴らしの良い土地で、氏神の柏木神社は、川上村の柏木で祀られていた仏像のために作られたと伝えられています。なぜ奈良県の川上村で祀られていた仏像が、和歌山県のかつらぎ町の神社にあるのでしょうか。かつらぎ町には次のような民話が伝えられています。

むかし、大和国の柏木村（現在の川上村柏木地区）に、聖徳太子が作り、後醍醐天皇が村人に授けたという由緒ある仏像が祀られていました。病を癒すご利益をもつ薬師如来像だったと言われています。延徳三年（二四九二年）のこと、村の神社の木を切り倒したところ、翌年、病気が流行して多くの村人が亡くなりました。仏像の崇りであると考えた村人たちが

は、「病気を流行らせるような仏様なら要らない」と、仏像にニワトリ模様の神主の衣装を着せ、はねつるべの井戸で一晩水責めにしたあと、簀巻きにして吉野川に流してしまいました。

それから3年後、紀伊国の滝村（現在のかつらぎ町滝地区）の桂川さんという人が、夢のお告げを受けて、紀の川の中州に流れ着いていた仏像を見つけ出しました。

滝村に持ち帰る途中、柏木村（現在のかつらぎ町柏木地区）の宮の岡という場所で一休みして、仏像を道端の石の上に



図1 柏木神社（天王社大明神）

置きましました。出発しようと仏像を持ち上げようとしたが動かすことができません。桂川さんは、仏像が「柏木」という地名に親しみを覚えて動かなくなったのだと考え、この場所に安置することにしました。

その後、近くにあった大きな楠の根元に、仏像のための祠が建てられ、それが現在の柏木神社の由来とされています。

この時、仏像が置かれたのは、柏木神社の南側を通っている道沿いに建てられている「柏木小学校」記念碑の隣の石と伝



図2 仏像が置かれたと伝わる石

えられています。またこの地では、昭和の初めごろまで、ニワトリを飼うことはねつるべの井戸を用いることが禁じられていたそうです。

現在でも、厄除けなどで神仏に祈願することが行われていますが、医学も科学も未発達であった頃は、神仏に祈るといことが最も有効な対策と考えられていました。例えば京都の祇園祭も、疫病を収束させるための祭礼が起源となっています。

普通は、神仏に対して様々な宝物を奉納したり、祭礼を執り行うことで、その力を借りようとするが、逆に祠を壊したり、神聖な場所を汚すことで神仏を怒らせ、目的を果たそうとする事例も知られています。

川上村の柏木の人たちが、由緒ある大切な仏像を仮装させたり、井戸に漬けたり、川に流したことも、単に役に立たない仏像を捨てるというものではなく、仏像が特別な力を持っていると信じた上で、疫病という尋常な方法では対応できない困難を打開するため、やれることは何でもやってみようと、精一杯考えた末の行動であったのかもしれない。

参考文献

かつらぎ町民話等編集委員会編一九九七『かつらぎ町今むかし話』かつらぎ町川上村広報編集委員会編二〇〇九『吉野川・紀の川流域散歩』川上村

森と水の源流館の感染症対策の記録



新型コロナウイルス感染拡大を受け、全国的に3月2日から学校は一斉休校。緊急事態宣言が4/7には7都府県に発出、16日には、全道府県にも拡大されました。当館でも4/2から予定していた空調設備改修後の開館予定を変更し、6/14までの休館を決定しました。その後、5/14の7都府県以外の緊急事態宣言解除後、「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」(日本博物館協会)等を参考に開館に向けて感染症予防対策を検討し、6/1に再開館を決めて準備を進めました。ここでは、これまでの対策を記録しました。みなさまに安心してご来館いただけるように引き続き感染対策を万全にしつつも楽しめる源流館を目指し進んでいきます。



2階受付前の床面ディスタンス丸太サイン (2m間隔)

対策後の再開館に際して、展示資料の提供で笹野義一さん、大山博康さん、松本勝典さんにご協力いただきました。また多くのおみなさまから激励の言葉をいただきました。記して深謝します。

来館者数の設定

3密を避けるため、開放できる扉や窓を開放して換気に努めたくうえで、人数制限をしました。人との距離を2m保ち(ガイドラインの基準「最低1m、できるだけ2m」より判断)鑑賞するため各フロア7人を定員として、入館時間を1時間半までにしました。8/1以降は制限を混雑状況が発生する前に実施する運用にしました。入館にはかならずマスクを着用し、入口で手指のアルコール消毒を行っていただいています。

2階フロア

エントランスおよび、エレベーターホール、受付にアルコール消毒液を設置しました。ソーシャルディスタンスを意識していただくために受付付近の足元には2mおきに吉野杉の断面を、源流をめぐる水槽前の足元地図には吉野川紀の川の距離感が意識できるように1.5mおきにマスを表示しました。このマスの1辺で12cmとなる計算です。吉野杉は大体40~50年生の間伐された人工林で2mの間隔になるようで、その説明にも使えます。このように、単にソーシャルディスタンスを意識させるだけでなくプラスαで源流館らしく楽しくなる工夫をしました。水槽や展示の亚克力板、壁なども感染リスクが高いとのことで、さわらないように掲示し、アルコール清掃を増やしました。

3階フロア



3階「川上村劇場」でも席間を空けました (2m間隔)

直接手でさわって楽しむハンズオン展示が多いのが特徴です。しかしガイドラインではハンズオンは感染リスクが高いため展示しないことが原則とあります。ハンズオン展示には覆いをし、内容が伝わるよう新たに展示パネルを作るなど見せ方を工夫しました。

どんぐりテーブルの丸太のイスも片側3脚から2脚に減らして密を避けるようにしました。



3階「何の足跡かな?」はハンズオン封印し、パネルを設置しました。



3階「野鳥の鳴き声をきこう」のハンズオン封印し、野鳥写真と解説展示にしました。

源流の森シアター

換気が一番しにくい空間で、扉の開放を行い、席間を2m取るなどの感染防止策を取りました。これにより定員は7人となり、来館者はのんびりと映像をお楽しみいただけたと思います。一方で入場制限を行う必要が出ました。8月1日からは、席間を1m、定員を15人に緩和して引き続き感染防止策を講じて運用しています。

ミュージアムショップ

出版物など手に取って購入を決定するような商品では消毒の難しいものもあり、撤去し、「川上の水」や「割りばし」など一部商品を掲示し、アイテムを絞って運営をすることにしました。



森と水の源流館 公式webページを ちょこっとリニューアル

この度、森と水の源流館の公式webページの内容が増えました。「新しい生活様式」に準じた「業種別ガイドライン」に基づき、館内設備・触れられる展示・映像等の利用の一部、イベントの実施などを制限してきました。そこで、来館できない方や滞在時間の限られる方にも当館をお楽しみいただけるようにと考えました。展示の写真をこれまでより大きなサイズで紹介する、実施できなかった参加型の調査の結果をさらに詳しく公表するなどです。

さらに、新しい学校生活や夏休みを迎える小中学生へ、宿題や自由研究の応援をしたいと、生き物の観察方法や標本の作り方を公開し、質問を受け付けることにしました。先生方に出張教室の代わりの教材として使っていたきたいというねらいもあります。なかなか川上村へ来ていただけない時だからこそ、身近な生き物を調べていただいたデータを皆様へ共有していきます。皆様のお住まいの地域、他の地域、源流の川上村を比較する上でもとても役に立ちますので、webページを通して、奈良県や吉野川(紀の川)流域の自然や環境を知り、活用していただきたいと思えます。

例年より更新頻度も増やしていきますので楽しみにお待ちください。励みになりますので、よくご覧になる箇所や内容についてご感想をいただけると幸いです。

オンライン授業の 取り組み



当館ではこれまでさまざまな事情で来館できない学校向けに出張源流教室を開催して源流の大切さを伝えてきました。ところが、感染症対策のため、これまでのように対面型の授業を行うことが難しい場面も出てきました。その一方、オンラインの講座や会議が社会で普及してきたことに伴い、インターネットを活用したオンライン授業のニーズも高まり、当館でも取り組みを進めているところです。ここでは、7/20に古山が実施したオンライン授業を事例として紹介します。このような事例を積み重ね、より広く源流の大切さを伝えていければと思います。

同志社国際学院初等部3年生の昆虫の学習単元において、オンライン授業を実施しました。これまでもテレビ電話を使用した10分程度の授業の“出演”はありましたが、授業一コマをオンラインで実施するのは初めてです。授業にあたり、事前に授業計画を共有の上、オンライン授業で話して欲しい内容をリクエ



ストしていただきました。また、教室で解説しているような臨場感を出せるよう、PowerPointなどのプレゼンテーションソフトを使った授業ではなく、事前に聞いていた子どもたちからの質問に答える形式で授業を進めました。カメラに物を近づけられる利点を生かすことで、カブトムシの下翅の収納の仕方、耳かきの梵天を使ったアメンボの脚の裏にある水をはじく構造の説明など、多くの子どもたちと対面で行う教室での授業では実施しにくい詳しい解説を行うことができました。オンライン授業終了後、担任の先生方にご意見とご感想を求めたところ、模型や実験を交えての説明や、子ども達に挙手させる場面を作ったことが雰囲気

を温めることにつながり、子ども達が安心して授業に参加できるようになったとのご意見をいただきました。また、オンラインなので「また会える」といった雰囲気や授業後の教室にあったように、オンラインでも身近さを感じさせることができるかと分かったのが収穫でした。後日届いた子ども達からのお礼状1枚1枚に昆虫の質問が書かれており、子ども達の「もっと聞きたい!」「もっと教えて!」があふれ出していました。「次がある!」オンラインだったから容易につながれる」だから質問をしても大丈夫と思ってもらえた結果なのではないかと思えます。(古山暁)

冬眠あけ! 森と水の源流館 三二展示

令和2年6月1日~6月30日

本三二展示は、昨年の12月より、空調設備改修工事のため長らく休館し、4月になってようやく皆様にお越しいただけると、開館予定日に合わせて意気揚々と準備してまいりました。しかし、感染症対策のため出鼻を挫かれ、ようやく6月からの展示となりました。改修工事に関連し、普段はできない大掃除や片づけをして発見したこれまでの展示したものや埋もれていたもの、水源地の森の風景や生き物の写真、川上村にすむ生き物の剥製や標本など、たくさんお披露目したかったのですが、開催時期の変更などの理由で、厳選した写真12点と標本1点の展示となりました。階段ギャラリーも併せるとさらに8点写真があります。



尾根部の池

今回展示できなかったものや剥製と一緒に写真が撮れるスポット、自然環境や生物の種類・特徴などについてミュージアムトークは、また後日に計画を練ることにします。せっかくですので、展示写真から1枚「尾根にあるふしぎな池」を紹介いたします。山の神の頭(標高1099.1m)に続く尾根には、2つの池があります。この池はシュレーゲルアオガエルの産卵地となっています。カエルをねらうヘビのヤマカガシなど、多くの生き物たちのオアシスともなっています。山の上に突然現れる不思議な池です。

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 森守募金 にご協力ください

ありがとうございました。
2019年度、473,954円の森守募金をお預かりしました。



奈良県、和歌山県の紀の川流域市町村の小学校への教材印刷、水源地の森の啓発看板作成などを行いました。今後ともご支援よろしくお願い致します。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：土倉庄三郎翁（1840～1917）の生家跡に立つ銅像（大滝）。吉野林業そして日本林業の父と呼ばれ、常に先進的であった土倉翁はこの時代に何をみているのでしょうか。

発行日:令和2年9月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館
TEL:0746-52-0888